

ルネサンス研究所 ニューズレター

2011年創刊号

2011年2月1日

【目次】

■12.12 シンポジウム特集

○開会挨拶：古賀暹「ルネ研をどうつくるかの討論の場」2p

○問題提起：市田良彦「ルネ研に託したいもの」3p

○討論：川上徹「社会の危機と左翼の責任」9p

新開純也「ルネ研参加にあたって」13p

太田昌國「近代という問題を大航海時代から考える」15p

■関西からの報告：榎原均 20p

■編集後記：松田健二 22p

発行 ルネサンス研究所

〒101-0065

東京都千代田区西神田 3-1-2 ウインド西神田ビル 502

メールアドレス <mailto:renesansken@gmail.com>

研究所ブログ <http://renaissanceken.blog106.fc2.com/>

【開会挨拶：司会】

ルネサンス研究所をどうつくるかの討論の場

<古賀暹>

今日のシンポジウムは「第一回ルネ研シンポジウム」と記されていますが、正確には「ルネ研」発足に向けた準備のためのシンポジウムです。

ある意味では、これは奇妙なことです。どのような会であれ、第一回の集会というものは設立総会であり、それにはある程度、会の運動方針や規約その他があらかじめ提出され、それに沿って議論がなされるものでしょう。しかしながらここに提出されている文書は、「ルネ研設立に関する提案」ならびにそれに対するコメント——いや、コメントというより批判だけと言った方かもいいかも知れません——であり、会則をはじめ研究所の設立に必要な事項は記されていません。このような世間の常識から見て、不十分な形で集会を催しましたことを、少なくともこの私は恥じてはいません。それどころか「画期的な」始まりであるのではないかとさえ考えています。

そもそも、この会を発足させようと発起人の方々が考え出したのは、二年前に遡ります。その中心は社会評論社の松田健二さん、同時代社の川上徹さん、情況出版の山下敦さん、図書新聞の井出彰さんなどの出版社の方々でした。そして、その問題意識を一言で言えば、現代の知的荒廃に対して何か出来ないかということでした。ご存知のように、現在の大学はといえば、各研究者はそれぞれが自分の専門領域に閉じこもり、社会全体の問題を捉えようとはしていません。また、それを学ぶ学生はどうかといえば、専門の知識を吸収し就職に役立てるということに汲々としています。

こうした状況において大学に知の復権を期待することは出来ないの

ではないか。それならばどうすれば良いのかということが出発点でした。そして、そのようなことを議論していく中で、どのようなささやかなものであれ、さまざまな専門化し、細分化された知を社会の変革に向けて結びつけていくような作業を行わねばならないのではないか。そのためにはどうしても研究機関が必要になるのではないかという問題意識が生まれてきたわけです。

また同時に明らかになっていったことは、大学のなかで進行している専門化、細分化の流れは、単に大学の中だけに止まる問題ではなく、日本社会全体の社会運動のなかでも進行している事態ではないのかということです。医療—福祉問題や環境問題、消費者の食の安全の問題、労働運動などさまざまな運動領域において新しい取り組みが開始されていますが、それらの社会運動はそれぞれ孤立して闘われているに過ぎません。しかも、それらの運動を横に繋ぐにはただ並列的に並べたのではだめで、それらの運動の根底に存在する同質なものに依らねばならない。知の復権とはそういうことなのではないか。これが研究所をつくらうとした根本的な考え方でした。われわれはそういう研究所は設立しなければならない。

そうした中で提起されてきたのが、京都の市田良彦さんのこの「ルネ研設立に関しての提案」です。後で市田さんからこの文書について詳しく説明していただきますので、ここでの私のコメントはここでは差し控えさせていただきますが、発起人の間で議論となった一番大きな点は、「共産主義」という言葉とその概念をめぐるものでした。共産主義なん

ていう古い号令を復活するのは何事であるか。こんな手あかにまみれた言葉というものではとてもじゃないがやっていけない。そもそも現在の日本で重要なのは社会民主主義をいかに前進させるかということであるのに、今さら共産主義などと言い出すのはかつてのセクト政治の延長でしかないのではないか。こうした現実主義的な側からの批判が展開される一方、他方では、それらと表面的には対立する形で、「共産主義者は共産主義を認めるだけじゃなくてプロレタリア独裁を認めなきゃならない。だが、この文書は社会主義を否定しているではないか」といった批判も飛び交いました。

その結果、とにかく、この市田文書に向けて討論してみようよということで今日に至ったわけです。ですから、冒頭に述べたように、今日の集会は設立総会でも、また、研究所設立後の第一回シンポジウムでもありません。ですから、今日の集会はルネサンス研究所というものをどうつくるかという討論の場であるというふうに考えていただいた方がいいんじゃないか。普通設立総会というものは、予めいろいろな討論の行き着くところが用意されていてそれに向けて議論がなされるもので

【問題提起】

「ルネ研」に託したいもの

<市田良彦>

「必然」の観念からの決別

様々なことの成り行きから、私はルネ研の設立を呼びかける文章を起草した。そして今またこうして、公の場で議論の口火を切ろうとしている。しかし、呼びかけているのは私である、とはどうにも言えないとこ

す。それが今日のシンポジウムにおいては、ある意味では明確ではありません。

私はこういう変わった研究会というか集会というものの司会をするわけです。ですから平たく言えば、このシンポジウムは、皆が参加することによって研究会をつくっていく、そういう研究所形成運動として了解していただきたいと考えています。先ほど私は、本日のこのシンポジウムの持ち方について「不十分」であるが「画期的」と述べましたが、翻って考えて見ますと、学問も運動も、専門化し細分化している中であって、それらの中に存在している「本質」的なものを探り出していこうとする我々の試みにとって、こうした形態はふさわしいものではないかと感じたからです。そして蛇足を加えますと、この「本質」的なものこそ共産主義という言葉であり概念ではないかと考えています。

ろ、言うてはならないと思うところを抱えたまま、ここにいる。今日は言わばその機微について話したい。それは同時に、私がこの「ルネ研」に託したいもの、この特殊な研究所の理念そのものにかかわっている。私たちはなにをしようと思っている、と私は考えているのか、そしてな

ぜそれを「私の考え」とは言ってしまうのか。

なぜこの文書を「私の考え」と言ってしまうのかははっきりしている。実際に書いたことに照らして見れば、なにも「はじまっていない」から、この文書はなにも「はじめていない」からである。なにを書いたかははっきりしている。「共産主義」である。「共産主義」を再開する——再びはじめる——その呼びかけ以外に、煎じつめれば文書が言うことはない。そのような呼びかけを、はたして個人がなしうるものなのだろうか。

かつて共産主義運動を突き動かしたものは、歴史の必然という観念であった。歴史には必然的な歩みがあり、その歩みは社会諸階級ごとに異なる歴史的命運を定め、最も未来に近い階級のなかにあつて、自らの命運を自覚した者たちが歴史を動かすべし——それが運動としての共産主義を支えた観念であった。そしてその「動かすこと」が革命の一語に託されていた。しかしほかならぬその共産主義運動自身が、身に染みて知っているはずである。現実の革命は、歴史の最先端にあるはずのところ、未来社会としての共産主義にもっとも近いはずのところでは起こらなかった。そしてその事実を説明するために、歴史的必然をめぐる科学的言説は、科学としてはほとんど無意味なほど学派の分岐と分裂を生み（自然科学者の集団にこうした分裂はありうるだろうか）、極めて貧しい、だからこそ根本的な問いを含んだ信条をそこかしこに撒き散らしている。歴史に、歴史的に形成された社会に客観性と必然性があるなら、ことはなるようになる、歴史を無理やり動かす運動など、まして未来社会の建設運動としての共産主義運動など、やるまでもない。私には、これほど「マルクス主義的」な態度はないようにも思える。マルクス主義が「科学」であったなら、である。歴史の必然をめぐる「科学」の立場からすれば、個人が共産主義を提起するなど、滑稽な振舞いでしかない

だろう。その時点で「私の考え」は間違っている。

しかしまた同時に、歴史はまたしても必然の観念を裏切るようにして、歴史を動かす革命のリアリティを見せていないだろうか。ソ連圏の崩壊以降、つまり一つの大きな歴史的共産主義運動の決定的敗北以来、いわゆる「南」の諸国で起こり、「9・11」すら現出させた反米かつ反資本主義的な質をもった諸運動の高まりは、まさに資本主義の「客観」的勝利を認めない「主観」の噴出であり、もう一つの「客観」と呼ぶに相応しい現象ではないのだろうか。呼びかけ文において強調した社会運動の新しい波は、間違いなくそれ自体として共産主義的な質をもっている。「敵」が世界資本主義であるという意味において。国営化としての「社会主義」を総体として提起せずに、世界大の資本主義と世界大の「もう一つの世界」を直接対峙させているという意味において。ではここで「共産主義」そのものの定義は？なにをもって私は、我々は、社会のあり方の名称として「共産主義」と呼ぶのか。しかし私は、問いをそのような方向に向けるのは必ずしも正しくないと考えている。私たちが今日目の前で見ているのは、なにをもって共産主義と呼ぶにせよ、共産主義の根拠は「客観」のなかにはなかった、という20世紀の共産主義者を打ちのめすと同時に救う事実ではないのか。それは、共産主義者たちはたしかに誤解していたけれども、絶望的になる必要はない、と語っているのではないか。政治の表層における力関係の帰趨とは別のところ、諸問題の具体的解決策とは別次元で、共産主義と呼ぶのが相応しい何かを求め、まさに「主観的」欲望を、「客観」は育て、「必然」を脱線させてきたのではないか。この欲望そのものは極めてシンプルである。〈私の解放を全員の解放と一致させたい〉。あるいは〈政治を異なる利害集団の調整には切り縮めたくない〉。またあるいは〈私の自由は全員の自由と一致せずして実現されない〉。すぐに分かるように、これは矛盾そのもの

であり、解決を図ろうとすれば全体主義に陥るか、共産主義を永遠の彼方に追いやるほかない。しかし、この欲望が世界的に「萎えた」ことはあったらどうか？ 現実の社会主義の崩壊は、むしろこの欲望を解き放ち、利害調整機構としての市場と直接に衝突させていないだろうか。

共産主義のすべての歴史を見直す

先をやや急ごう。自らの直接的利害から出発するのでないとき、また他人への憐憫や倫理観から出発するのでもないとき、政治運動はすべて共産主義の質を孕んでいる。〈私〉よりも高次の〈我々〉により、〈私〉をも解放しようとしているのだから。共産主義こそ、人を「政治運動」へと駆り立てる矛盾なのであって、だとすれば、共産主義は何よりも「必然」の観念から解放してやる必要がある。マルクス主義が「必然」により運動に勇気を与えてきた装置なのだとすれば、マルクス主義からさえ共産主義を解放してやる必要がある。共産主義者にとって、矛盾は解決を図る以前に、その矛盾そのものに時々に対応しい「形態」を案出し、与えるべきものにすぎないのではないか。何より、プロレタリア独裁国家は「国家を死滅させる国家」という矛盾の定在だと定義されていたではないか。「必然」の観念に後押しされた運動がほぼ死滅した現在、裸の矛盾としての共産主義に向き合う、むしろチャンスが訪れていると言わなければならない。

しかし、だとすれば共産主義運動の歴史すべてを見直す必要がある。その歴史は失敗と敗北の連続の歴史であったとしても、間違った共産主義運動などなかったことになるからだ。運動に内在する一つの事実性の名が共産主義であるとしたら、それに忠実であろうとする運動にはそもそも「正さ」と「間違い」という基準など無縁であるはずだ。労働運動をやること自体に「正さ」や「間違い」はあるか。「正しい」暴動と「間

違った」暴動を区別することに意味があるか。だとすれば、様々な個別具体的な利害に突き動かされてはじまった運動が、その限界に突き当たり、政治化しようという一歩を踏み出すことに「正しい」も「間違い」もない。そのこと自体に異論は出にくいとしても、こう問い直してみればどうか。共産主義とは勝利のない運動、欲深いゆえに目標に到達できない人類の自然発生的な痙攣運動なのか。すぐに気づくはずである。これもまた、あるいはこれこそ、共産主義運動の総体を否定する客観主義にはほかならない、と。私が運動史や歴史の「見直し」と述べることで言いたいのは次の点である。この運動は労働運動と同じく、敗北と同程度に勝利も勝ち得てきたと考えるべきだろう。なにより共産主義への恐怖が、資本主義に軌道修正を強いてきたし、労働者による抵抗が資本にイノベーションを強いてきたとも言える。客観主義を手放すとはつまり、勝利と敗北の尺度に見直しを迫ることでもあるのだ。

「綱領」や「路線」の一言に体现される主義者の主観と、運動の現実的結末はつねにずれる。60年安保闘争がそれを最先端で闘った共産主義者同盟の思惑とは違った一種の「国民革命」を日本の政治にもたらしたように、68年から70年の闘いがいまだ評定されているとは言い難い多様な変化を運動と社会そのものにもたらし、分かりやすい形態の「階級闘争」を政治の舞台から退場させたように、主義者の宿命は自らが立てた勝利の基準に照らせば、つねに失敗することであると言ってよいほどである。ここにおられる年配の方々、とりわけ実践に深く関与されてきた方には、何度も耳にしたような指摘にすぎないだろう。私が提起している「見直し」も、主観と現実の「ズレ」の調整と括ってやることはできる。しかし、そこに付け加えたいのは、決して「現実主義者」になることなく、という要請である。「現実」はつねに、矛盾を何らかの形で解消した後の残骸だからであり、そこに尺度を求めた時点ですでに、

人はすでに共産主義者ではない。それに「現実主義」的に今日の結末を眺めたとき、なにより承認しなければならないのは、20世紀のコミンテルン型共産主義運動は最終的に潰えた、という事実だろう。運動の果実がどこに実っているのか、宿っているのか、知っているとは主張しうる者はどこにもいない。共産主義という視点から、見直すしかないのだ。

この視点を説明するために、ルネサンス研究所という名前にある「研究所」という組織ないし集団のカテゴリーについて、私なりの理解を述べておきたい。

「理論」「実践」「党」をめぐる問題

この「研究」は「学者」にはなしえない。学者の視点は「党派性」を排したところ、ことがらをまさに客観的に外から眺めるところにしかないからである。なにより学者は「矛盾」してはいけない。社会と歴史をめぐる客観性とは学者の自然発生的イデオロギーであり、それが何をなしうるかは、私たちは昨今の「1968年」ブームにおいて目にしたばかりだろう。学者は「正しさ」と「間違い」の判断を留保する代わりに、運動史を平均値に還元し、政治をそこへ到達する大衆的コンセンサスのプロセスにすり替える。もちろん、知識を集積し、整理し、提示する装置としての「学者」はいかなる政治集団にとっても必要だろう。状況への介入を試みようとする者にとって、学者的視点は前提となりさえするだろう。しかし、状況の精緻な地図を描くことと、その地図を塗り替える策をめぐることは異種の問題であり、ヘーゲルもどこかで述べていたように、水泳を合理的に教えること（つまり学者に可能な水泳へのアプローチ）と、泳ぎを実際に覚えることの違いに似ている。さらにそのヘーゲルに対してはこう言ってやることができる。矛盾は事後的に見れば弁証法のプロセスを辿ったと言えても、今・ここでその弁証法を作動

させるところまでは保証しない。そして矛盾は、ほとんど誰も予期しないところへ移動して噴出し、我々はそれを事後的に、動揺しつつ承認するほかない。

またこの「研究」は様々な運動現場をもった「活動家」によってもなしうるものではない。現実の運動は労働運動であれ政治運動であれ、他の社会運動であれ、固有の争点に拘束されるほかになく、その争点を徹底して闘えば自然に共産主義に至りつくような特権的闘争の舞台が消えたという事態こそ、私たちが今日遭遇している現実であり、また、どんな運動にも共産主義の萌芽を宿させる実際的契機になっているだろう。労働者階級の利害は今日まったく一様ではないが、一様でないからこそ、いわゆる「戦線」を越えた共闘の必要性を強く自覚させている。しかし固有の争点にとって必要とされる活動家の能力は共産主義イデオロギーとは何の関係もなく、よい意味で経験主義的にしか開発も蓄積もされない。そして経験主義には絶対的な限界がある。ほかならぬ経験主義的であることだ。党派経験をもち活動家の多くは骨身に沁みて知らないだろうか。大衆運動の現場における活動の限界が自分に「党」への加盟を決断させた、ということ。「党」が代表する一種の「普遍」を経由することでしか、「個別」の問題への対処の仕方が分からなくなるときが訪れる、ということ。そのとき、活動家は「個別」と「普遍」をまさに直結させようとするわけで、いかなる「党」に彼が加盟するのだとしても、彼は「共産主義者」になっている。そして「党」が実態としてほとんど存在しなくなっているからこそ、今日、この欲求は社会のなかに広がっているようにも思える。

ではこの「研究所」は、学者的な外部注入すべき視点と運動経験に内在する視点を交差させるという意味で、言い換えるなら、「理論」と「実践」を媒介させるという意味で、「党」的な試みなのだろうか。私はそ

ういう方向性をあらかじめ排除したくはないが、しかし「党」についてはまた別の考えをもっている。すでにあるところで書いたことではあるが、繰り返しておきたい。

共産主義こそ本源的であるという視点

簡単に言えば、「党」は共産主義者の自然発生的欲望、つまり私の解放を全員の解放に直結させ、私の自由と我々の自由を無媒介につなぐという無理難題を承認しつつ、現実にはそれに抗うことで政治をコントロールしなければならない、ということだ。共産主義を承認すればこそ、あるいはそこに含まれる欲望の性急さを知っていればこそ、それを政治的な力に代えるには知恵がいる、ということを知っている者はいないはずである。無理難題は、普遍的な理論によって個々の実践を導く、つまり理論と実践を直結させる、という形を取って党に降りかかる。直結させようとしないうちは実践におけるご都合主義を指弾されてしかるべきだろう。しかし理論と実践の直結は、一種の堂々巡りを招来させる圧力を党に対し不断にかける。正しい理論しか実践を導くことはできないが、正しい理論とは実践を導いた理論のことである。正しくなければ、理論をもっていなければ、「勝てない」が、勝ってみなければ正しいかどうか、理論をもっていたかどうか分からない。「勝った者が正しい」まであと一歩だろう。そんな一歩を踏み出せるのは、ことがらを事後的に眺める理論家だけであり、実践の渦中にある人間には、この一歩は端的に意味がない。実践に役立つ何も教えてくれないのだから。ゆえにしばしば、実際に党のなかで働く実践論は「とりあえず勝つまで止めない」という根性論であるか、「理論」を実行する成員の能力や倫理の問題にすりかえられる。

また、理論と実践の直結は、共産主義の理念が大量殺人を引き起こし

た、というよくあるタイプの反共イデオロギーと紙一重のところをもっている。実際、現に起った失敗や悲劇のゆえに、多くの人々が共産主義を捨てた。しかし現実の悲劇の多くは、革命の名において何をどうしていいか分からないから、とりあえず反革命を殺した、ということではなかったか。理論と実践を端的に同一視すれば、そういうことになってしまう。

多くの実践家は「知って」いるはずである。党とは方針が自明ではないと知っている者たちの集団であり、彼らは、掲げる理念と目標たる現実の間には、何も書かれていない広大な空間が広がっていると承知し、そこを埋めようとして「なかに入ってくる」。党は積極的な意味において自らの無知を自覚した者たちの集団としてはじまる。理念がいつか「自然に、実現されるものなら、党など必要ないだろう。行動方針がなくとも、歴史の法則が同じ結末を招来してくれるだろう。党が必要であるのは、理念と現実の間に空白が横たわっているからにはほかならず、党員はそこに「実践」の名を与えてきた。しかもその空白は、現実には埋めべき空白なのではなく、その前にまず開くべき、さらに拡大すべき空白なのである。その理由は、共産主義の欲望がつねに性急だからである。我々と私を直結させたい、とは、我々という普遍的次元と私という個的次元、理論的抽象へと向かう方向性と個別具体へと向かう方向をショートさせることだからである。

そして「党」とは実践的空白——理念と現実の間にあって「実践」だけが埋めうる——へのこの欲求、「実践」を求める活力を行動方針に変換しなければならない装置である。しかし、であればこそ、党は流入する無知に翻弄され、その圧力に抗する仕事に没頭させられる。内部論争が沸き起こり（行動方針には「議論の余地」という、「数学」にはないものがあるからこそ可能な事態である）、反対派は粛清される。官僚制

が生れる。無知こそが「ない」ものとされる。「そと」に向っては、「党」とは理念と現実の間の溝をすでに埋めた者たちの集団なのである。「党」を「党」足らしめるのは、たしかにレーニン主義者たちが言うように「綱領・戦術・組織の三要素である」のだが、当の本人たちがしばしば、三要素の結合は、それ（三要素のそれぞれと結合の中身）が分かっているから我々は「党」を作るのだ、「党」はあるのだということを忘れてしまう。あるいは忘れたふりをする。その時点で、実践家は単なる間抜けな「理論家」に舞い戻っていると言うべきだろう。マルクス・レーニン主義が大量殺人を引き起こしたのだと語る者たちと大差ない、と。

つまり党の問題とは、この社会のなかで人間関係を媒介している諸制度に抗って、本源的な自由、私の自由と我々全員の自由の無矛盾を求めようとすれば、すぐに行き当たらざるをえない問題である。誰かの自由を制限することを本質とする制度も、同じ問題に対する解答であると言えるほどだ。そんな欲深いことを考えてはいけない、という人類の知恵であるかもしれない。しかし、裏を返せば、この共産主義的な欲望はそこまで深い、制度によってコントロールしなければならないほど、たえず社会を突き動かしている、ということではないのか。つまり党の問題とは実は社会そのものの問題にほかならず、党の問題として孤立させて考えても、仕方がないと私には思えてならない。なにより、党も一つの制度なのだから。

しかし、ことは結局制度問題に行き着くという考え方には私は与したくない。制度問題が浮上してくる手前には、飼いならすことが極めて困難な共産主義がある、ということを見ずえることからはじめたいと思っている。制度を変える力はそこからしか汲み取り得ないと信ずるからである。現実の社会主義を崩壊させた力もまた、共産主義だと信ずるからである。だから私は「見直し」を提案した。共産主義こそ本源的である、

という視点から、歴史と運動を眺め直すことを提案した。

<討論を終えての雑感>

趣意書は言ってみれば「国家衰退論」（今日、すでに国家は「死滅」に向かっている）に立っていた。そして趣意書への数々のコメントや会場での議論でも、「国家強化論」（今日、国家はますます「強化」されている）が留保や異論として提出されたように思う。しかし、私が上の発表で述べた「客観主義批判」＝「主観主義的共産主義論」は、強化論と衰退論の対立とは重ならない位相をもっている。煎じつめれば、衰退や強化の根拠を客観的に数え上げて論争するようなことをしても無駄ではないのか、と問題提起したつもりである。「今の社会はこうですよ」という議論が際限のない指摘の羅列とお喋りに堕していく事態に、私はうんざりしている。だから、「直接行動を」という主張に流れる「アナーキズム」にも強く共感する。しかし「アナーキズム」は集団性をどうやって作り上げていくのか、どこに今日の「ソビエト」的なものを見出していくのかについて決定的に弱い、という「客観主義的」な感想ももっている。「国家の強化」も一面では真実だと考えている。私自身がつまり揺らいでいるわけだが、その揺らぎそのものをとことん維持すべきだと思っている。研究所活動を通じて、自分の固定観念が揺るがされることを期待しています。干からびた信念などもちたくない、そんなもので人を動かしたくない、というのが、研究所開設にあたっての私の所信であります。

【討論】

社会の危機と左翼の責任

<川上 徹>

■私の略歴

私は1940年生まれ。60年安保は20歳、70年安保は30歳。60年安保の年に日本共産党に入党し、64年民青主導による再建全学連の委員長となり、72年、いわゆる党中央による「査問」事件で、党と民青の機関を罷免されるまでのおよそ12年間、共産党系青年学生運動に責任ある立場にありました。

若き時代、職業として革命を目指す専従たらんと欲し、そのために生涯を捧げようと思っていたわけですから、現在の私があれこれ考えること、ここに至った心境と対比したとき、あまりの落差の大きさに自分ながら驚いている次第です。その意味で現在の私は、何らかの意味で共産党「系」と括られたり、呼ばれたりする立場にはありません。党内に友人はいますし、共産党「系」といわれる知人も多い。しかし、その立場から、いわばムカシのよしみで、何らかのことを訴えたり、ましてや呼びかけたりすることはできません。ですから、私は全く個人の立場で、今回のシンポジウムに参加させてもらっているわけです。あらかじめご理解をお願いしたいと思っています。

もっとも、私が過去において関わったさまざまな党派的な実践、事実は消し去ることはできませんし、勝手に書き換えることもできません。私はむしろもう一度それらを掘り起こし、現代の危機——私はそれを「社会の危機」という側面では本日は発言しようと思っているのですが

——との関連で、いったいそれらがどういう因果の関係にあるのか、無いのか、あるとしたらどの程度あるのか、それを考えてみたいと思っています。有り体にいえば、いささかの溜息を込めて「あれはいったい何だったのか」と、思考は行きつ戻りつしているわけです。

ちなみに私は、1980年、数人の友人とともに同時代社という出版社をはじめ、生活の糧として現在までつづいております（糧のつもりで、というべきかも）。はじめた当時はまだ党籍があり、それは90年までつづきました。じつに私は30年間の長きにわたって共産党員でありつづけたこととなります。それには、私の優柔不断、決断のなさなどが主な要因ですが、詳しいことは省略します。ただ、党から離れるにあたって、私の尊敬する哲学者古在由重先生、農村婦人運動の先覚者丸岡秀子先生など——この人たちは明治の時代精神ともいうべき骨太のそれを体現していたところの「時代への抵抗者」でした——への敬愛の念が強かったことは述べておきたいと思います。実際、古在氏が亡くなったとき、私は追悼の集いの事務局をやったのですが、そのときの「死者に鞭打つ」党の振る舞いに、私の堪忍の袋の緒が切れたのが、党と決別するきっかけとなりました。そしてその後、かなり強引に私を党から引き離してくれたのは、今はなき政治哲学者藤田省三先生でした。藤田氏はハンナ・アレント『全体主義の起源』（全3巻）を手取り足取り私に教示してくださり、それは私の人生再出発の書となりました。私はもちろん研究者でも学者でもありませんから、その後の『人間の条件』などともに、私

の体験的想像力に頼って読み終えることができた、いまでは思っております。そうした想像力の糧を、30年間の党員体験は残してくれたという意味で、決して無駄ではなかったと納得しているのですが。

さて、本論に入ります。

■社会の危機

人類生存の危機と言われます。戦争の危機、核の危機、環境の危機など、指摘されている危機は、いずれも人間が生存していく上で根源的危機であることは間違いありません。これらの危機の中で私が言いたいのは、社会存続の危機ということです。いま、ボくらにとって最も身近な危機は社会が崩壊してしまった——いや、過去形で言うのは早いかもしれない、崩壊してしまいそうな危機というべきかもしれない。

私がここで言う社会とは全体社会に対して部分社会についてです。つまり、私たちが日常に生きていく上でさまざまに参加しているもの、学生だったらクラスとか部活とか、地域社会でのお祭りとか、労働者だったら労働組合とか生活扶助組織とか、あるいは生活協同組合とか、それぞれの個人が自立的、相互扶助的に有機的につながっているもの、すべてをさしています。

私自身がこれまで生きてきた過程を見ても、子どもたちや孫たちの生育過程を見ても、人間は社会という羽毛に包まれていなければ生きていくことはできない、ということです。育つことはできない、ということです。因幡の白ウサギではありませんが、赤むくれのまま風の中にさらされていることは地獄なのです。とくに子どもたちはそうです。なぜなら、彼らはまだ面の皮も薄いし、外界のばい菌から身を守る皮膚も、ま

だまだ十分ではないからです。年長の子どもたち、つまりいまの若者たちにも、こうしたことはかなり当てはまるようにみえます。

一方で全体社会の方は、効率性の原理でますます制度とシステムを完備しつつある。制度とシステムが部分社会を解体しながらこれを飲み込み、部分社会崩壊の跡地をブルドーザーで地ならししているように見えます。この辺の事情は多くの社会学者が指摘しているところでしょうから省略します。問題は、どんなにシステムが効率的に完備しても、人間は生きていけない、ということです。人間は悲鳴を上げます。悪魔の挽き臼とはこういうことかと、私などは実感します。私の盟友・宮崎学の近著『続・突破者』で、彼は自身を育ててくれた部落解放運動が、こうした近代化の波に飲み込まれていく事情を痛苦の念で記しています。昨日まで生き生きと闘っていた労働組合が、あっという間に官僚化し、組織の形骸化が進み、いうなればシステム化し、労働者にとって部分社会たりえなくなっていく事情も同じだと思います。

私の家の近くに居酒屋があります。店長が地元の人間で、地元の中学・高校卒で人柄がいいせいか、そして安いせいか、近隣の若者のたまり場になっている。いい風景です。私などは時々ここに寄って、顔見知りになった連中と雑談することもあるのですが、他愛ない彼らの会話を聞いていて、ここで若者たちは癒されているのだな、と感じます。小さな部分社会です。下町の板橋だからなのかもしれませんが、都内の片隅にまだまだこうした空間がどの程度残っているのでしょうか。

60年代前半、私の学生時代、運動が停滞したらまずクラス討論、サークル討論、寮での討論を組織せよ、マイクのアジ演説に頼るな、とい

うことを先輩からきつく言われました。駒場の自治会常任委員会での議論は、いくつのクラス・サークル・寮部屋でそれができたか、どんな議論だったか、連日のようにまじめに検討された。論議が興ったときの翌日は大きなデモが実現した。これと対比して、60年代末のバリケードは、日共系、反日共系おしなべて、バリケードの内部の結合は強くなったかもしれないが、そこから外れた、外された多くの学生の部分社会を崩壊させた、崩壊に寄与した、と今では思っています。

おそらくこれからの時代の課題として、大・中・小の、生活上においては重なり合う、幾重もの人間の有機的つながりを、どう再建していくか、創造していくかが問題となるでしょう。社会の再建です。その際、さきほど述べた、核の問題、環境の問題、貧困の問題など、人間生存の根源的危機のさまざまな局面が登場してくるにちがいありません。階級の問題も出てくる。社会主義の問題も出てくる。共産主義を語ることになるかもしれない。ただ、私が言いたいのは、社会を忘れた階級ではだめだということ、社会を崩壊させ、社会を踏みつぶした社会主義ではだめだということ、です。

■社会の危機と左翼の責任

社会崩壊の危機——どうしてこんなになってしまったのか。

一つの見方として、左翼が衰退したからこうなった、という見方がありえます。危機の時代にあたり、その打開のために先頭に立って闘うべき左翼が衰えたからだというものです。たしかにその衰退は著しい。今年、共産党は党大会を開きました。そこで党員の年齢構成が問題となったそうです。それによれば、65歳以上が4割を占めているという。こ

れはいささかマジック的な数字で、団塊の世代を含める形で60歳まで仕切りを下げて統計をとったら、その割合はおそらく7割以上を占めるのではないかと思います。ぼくの世代で現在も党に残って仕事を続けている友人たちは、もっと割合は多いだろうと、悲痛な声を上げています。この党に未来が無いとは言いませんが、活気のある党として生き続けることは困難だろうと思います。おそらく数年の単位ではないか。社民党の友人に聞くとこの党も同様の悩みを抱えているようです。

現在私は「コレコン」という集まりを通じて、新左翼諸党派の友人たちともつきあいがあります。この友人たちの悩みは、なにせ所帯が小さいところから、もっと深刻だといえるかもしれません。団塊以上の人たちが多いのですが「俺たちが終わったら党派もオワリかな」。そんな呟きが案外リアリティがあるように思います。こうして戦後左翼は総体として衰退の一途を辿っているように見えます。

左翼が衰退したから社会と社会運動が危機にあるというのは、これは逆だろうと思います。もちろんそこに主因があるとは言いませんが、むしろこの危機を生み出すに至っては、左翼にも責任がある、と私は思います。

私自身の経験に即していえば、党は一貫して社会を軽視し、本気で民衆自身の自治への要求、欲求を取り上げることはなかったと思います。もちろん、個々の党員はべつにして、です。党が大事にしたのは党自身です。民衆自治のさまざまな組織やつながりを大事にしたのは、極端にいえば、党の指導を動力として伝達する、いわばベルトとして活用・利用の対象にただけです。ボルシェヴィキ支配下のソ連圏では、張り巡

らされた密偵によって民衆の相互不信が振りまかれ、自治の力は消去されていったと言われています。おそらくそうなのでしょう。

私の「査問」事件にいたる過程では、宮本指導部が「人民的議会主義」をいい、私たちが、民衆自身の自治組織をもとにした幅広い統一戦線の実力を育てることなしに、議会での多数派を勝ち取ることも維持することもできないと主張したのは、今では相対的に正しかったと思っています。しかし、そういう私自身も、統一戦線を横につなげ、括り付けるには横に貫く赤いベルトがしっかりと形成されていかなければならないと考えていた点で、主客逆転した党至上主義の尻尾をつけていたと思っています。

昨年亡くなった労働運動家の樋口篤三さんの晩年の著書に『めしと魂と相互扶助』『社会運動の仁義・道徳』というのがあります。お読みになっていない方は、タイトルから中身を想像してみてください。私はいま樋口さんの遺稿を整理する作業に関わっているのですが、樋口さんは戦争中の予科練時代の同期会に一度も欠席したことはなかった、ということを知り、私は大いに驚きました。70年代から80年代にかけて、新左翼労働運動の闘士として、さっそうとして闘っていたころもです。同期会では仲間とともに軍歌も歌っていたそうです。樋口さんはそこで癒されるという面もたしかにあったのだと思う。私は、彼の晩年、予科練の同窓会に行ったよ、という話は聞いていたのですが、ずっとそれ以前のことは知らなかったし、そのころは誰にも言うてはいなかったようです。樋口さんといえども言えない雰囲気だったのでしょう。「冠婚葬祭をだいにしろよ」は、彼の口癖でした。「左翼はこれがだめなんだよな」とも付け加えました。皮肉にも樋口さんが亡くなって、路線の違い

をもとに、偲ぶ会に出られないという方々もいました。事情は理解しますが、私は象徴的な意味で、これで左翼は完全に終わったな、と確信しました。20年前の私自身の体験に重なりました。

■展望はあるか

これからの時代、どんな面でもよい、どんな場でもよい、人々の自治と相互扶助のつながりを大事にしていきたい、と思います。体力も衰えた高齢者になってしまいましたが、可能な限り努力はしていきたい。だが、この先、展望はあるのかといえば、私は非常に暗い、と思います。

まず若者の未来が非常に暗い。就職氷河期とか言われています。内定が57%だという。10代の失業率が10%もあるという。働こうと思っても働けないわけですから、将来図を描くのが非常に困難になっている。政治に見通しが無くなってから久しい。ぼくは最近の新聞は読むのが苦痛です。何と幼いことか。まともな政治家、右であれ左であれ、職業としての政治家、プロとしての政治家がほとんどいない。これは民主党に限ったことではない。もちろん自民党もそうだし、共産党も社民党も例外ではないことは先に述べました。メディアの「世論調査」であつという間に政治が変わる。風の政治です。言うまでもなくこれは社会の劣化、崩壊の結果にほかならない。友人・宮崎学は『続・突破者』で、もう手遅れだといっています。結論としての絶望論にふれています。絶望に対する覚悟が必要だ、とも言っている。さまざまな時代の兆候から、私もこれにかなり共鳴する部分があるのもたしかです。

しかし、明日をも生きていけるか彷徨っている人々にとって、アジア・アフリカの飢えた民衆にとっては「絶望する暇もない」というのも

事実です。ただ、さらにもう一回転して、絶望しているのに、あるかのように論理を組み立てる、左翼の陋習の愚を重ねることはもうやらないようにしたい。

ルネ研参加にあたって

<新開純也>

1) 私は 1959 年、京大に入学しました。60 年安保の前年です。またご承知のようにブント 58 年 12 月に結成されましたから、それまでの世代は共産党を経験したのに対して私の世代から新左翼に直行したということになります。60 年は、京大教養部自治会委員長(62 年大管法闘争時同学会委員長)でした。勿論 60 年安保では、ブントの若い一兵卒として戦いました。

60 年安保が、“民主主義か、独裁か”と丸山や竹内の主張の中で、6・19 の“壮大なゼロ”に終わり、私(達)の、(リ)スタートは、それをこえる運動、思想、党とは、という事になりました。

2) ご周知のようにブントは、党内闘争から分裂に至りますが、時間がありませんのでここでは省略します。

わたしはまず、6・19 を乗り越えていけば運動が権力に到達するとはいったいどういうものかと思案し、当時の革命の原形と常識化されていたのはロシアのソヴィエトですが、先進資本主義国、具体的にはドイツのレーテ、イタリアの工場評議会、イギリスのショップスチュアート運動について研究しました。その時書いたのが「ドイツ革命の敗北とローザ」という小論です。そのような事を通して、“先進国革命”のありかたとレーニン、ローザ、トロツキーの思想につき考えました。その時イタリアの評議会との関係で当然グラムシを——グラムシ選

集が山崎氏等の訳で紹介され始めていましたが——研究しました。当時、グラムシはイタリア共産党(トリアッテイ路線)の源流即ち構造改革路線の源流とされ、そのようなものとして紹介されていました。ですから私がグラムシを評価(高く、肯定的に)した時、ブント圏からも、逆に構改派からも——今でも友人の元フロントの議長小寺山や白川などには、新開がグラムシをやるのは何故だといわれますが——ある種奇異に見られました。しかし私のグラムシは、構改からのアプローチではなく評議会からのもので——それが正しいと確信し、だから、例えば片桐氏の「グラムシコレクション」の改題など読むと亡くなられた方に申し訳ないが“なんて馬鹿げた”と思います——グラムシは「南部問題」とレーニン(特にコミンテルン 3,4 回大会)を経てサンジカリズム的要素を脱却したと思っていますが、終生、評議会＝暴力革命主義者であったと思います。わたしは、グラムシがサンジカ的傾向を脱却するプロセスと、自分がブント的急進主義を脱却する過程をいわば二重写しにしてレーニンを深く研究しました。ですから私にとってのグラムシは、奇異ではなく内的必然のものです。言葉を変えていえば、革命は、主意主義(者)によってしか成功しません、しかしその主意主義は、主観主義でない客観を捉えたものでなければなりません。時間がありませんので詳しくはふれませんが、第一次ブント

の三つの源泉といわれるトロツキ的レーニン、宇野経済学、主体性唯物論はそのような立場からすれば誤っています（加々美氏が、毛沢東思想の源流としての主意主義—王船山—について興味ある考察をしています（『裸の共和国』情況新書）。私の考えの骨格は、その時から変化していません。そのようなものとしていまもレーニン主義を標榜しています。

3) 68 “世界同時革命” は、60 年安保の民主主義闘争に較べより深化した闘争でした。世界的には、最後の古典的（帝国主義）民族解放戦争としてのヴェトナムとフォーダイズム（ケインズ的福祉国家）との闘争の合流として単に“政治革命”でなく“社会革命”（の萌芽）の要素をはらんでいるという意味で。両者（古典的植民地主義とフォーダイズム）に勝利することで帝国主義の新たな局面→グローバル化と新自由主義をうみだし、それに包摂されることで敗北しました。

4) 現状認識

- ① 民主党政権の変質—生活第一と東アジア共同体→新成長戦略と日米同盟強化、ここに見られるのは国家の前（全）面化。
- ② この変化を捉えるためには、08 金融恐慌以降の大転換—機軸国家の移行の開始という視点があるのでは。読めもしない英語の『WHEN RULES THE WORLD』（ペンギン出版）という本を眺めて見ますと、GDPベースで 2025 年に中国はアメリカに追いつき 2050 年では米はインドと並んで中国の 6 割、その後 1 割前後でブラジル以下が続くという予想が出ている。勿論機軸は、単に生産力だけでなく金融、軍事、文化（イデオロギー）の総体によることは、水野、萱野氏（集英社新書）の指摘のとおりですが、71 年ニクソンショック（ドル兌換停止）ヴェトナム敗北→社会主義の崩壊→新自由主義→その破綻としての 08 恐慌という流れのなかで 08 恐慌は、

機軸国家の移行を明確にする最初のマイルストーン。

③ パックスブリタニカからアメリカナへの移行も半世紀かかっており、またのんびりと移行するのではなく第一次大戦、29 年大恐慌、そして決定的には第二次大戦という画期となる“事件”をへて移行はおこなわれた。今後どのような事件をへて移行が進行するかはだれも予想できないが、世界システム論者や宇野経を待つまでもなく、機軸の移動の過程は再分割（勢力の移動）、危機、統治形態の変化を伴い「国家」が前面化せざるをえない時代であり排外主義が台頭する。ルネ研が共有しなければならないのは、これにたいする危機感である。

④ このような局面での対抗運動は、国際的、国内的なマージナルのところからおこる。典型的には、中南米の新自由主義、左派（政権）、下からの社会運動、三者のせめぎあい（広瀬「闘争の最小回路」）のように。我々はたとえば、サパテイスタ、ヒズボラのような戦闘機関（政治—軍事）であると同時に民生機関（生活）であるようなものに着目する。“民生なくして革命はない”が、ホロウエイのような「権力を取らずに世界をかえる」のような主張は、現在の過渡的情況の絶対化であり“権力を取らずに世界は変えられない”と主張する（いうまでもなく、今、突撃せよではなく、現在は、「持久戦」の段階）。

先進国では、政治的—生活的戦線を空間的に（根拠地）つくれない。様々な運動（政治、社会、労働）を（政治的）統一戦線にとりこむところで——例えば、私の参加している京都の反戦・反貧困・反差別共同行動も諸戦線を結集した一個のカンパニアである。（最良のチャレンジと自負するが）。

現在必要なのは、たとえカンパニアであったとしても最大限諸諸

動を結集した政治的戦線でありまたそれに関連した私の大好きな“外部注入”(全面的政治暴露)だが、同時に生活空間をユニオン運動(アメリカの社会運動ユニオニズムほどの広がりを持った)、社会的企業やNPO(関生、釜崎支援機構)を通して(当然、行政との関係を含めて)ある種の根拠地としてつくる必要がある。京都では、諸運動、個人を結集したその提携をはかる溜まり場としてのNPO(「きずな」)をつくる。

5) いくつかの理論的問題

持ち時間がなくなりましたのではぶきますが、ルネ研は研究所ですから当然研究テーマを設定しなければなりません、その中に、現在は、資本主義のいかなる段階か、グローバリズムと国家、現在の革命の主体とは(労働者階級の現在的再定義)といった問題をぜひ入れていただきたい。

以上をもちましてルネ研参加の弁とします。

「近代」という問題を大航海時代から考える

<太田昌國>

20年間の社会運動のなかで

今まで『情況』という雑誌にはほとんど縁がなかったのですが、去年ぐらいからでしょうか、何回かいろいろなテーマでインタビューを受けたり座談会に出たりしました。そのせいでしょう、市田さんが起草されたルネサンス研究所の趣意書が出来た段階で、編集長の大下さんがメールでそれを送ってこられました。それを読んで、ここで使われている「ルネサンス」という用語は、市田さんの言い方によれば「社会運動の、こ

の二〇年間における世界的再生」を示しているわけですが、そこでの分析に、この間、私自身が突き当たり感じていた問題意識と共通するものを感じたのです。そこで、一度だけ、ついふらふらと会議に出ちゃったんですね。それはまだ発起人が決まる前だったのですが、その後何回か会議が積み重ねられたと思いますが、まったく都合がつかず出席することができませんでした。そうこうしているうちに、発起人にならないかという勧誘が一度あって、それから、この発会式の日には発題者にな

ってほしいという要請がありました。断る理由もさしあたって見つからなかったのが引き受けてしまったのですが、いざ、この日を迎えて、川上さんじゃないけども、動揺して、動揺をそのままひきずって、ここで話し始めておりますので、おそらくその動揺をかなり無残にさらけ出しているという、そういう話にしか、この二〇分間はならないと思います。

私なりにこのルネサンス研究所の趣意書や今日の集会のチラシをプリントして周囲にまきました。しかし、正直言って、私もそうですが、私が関わっている運動圏の人たちは、この一九人の発起人の人たちの大多数の人とは、ちょっと違う文化圏に住んでいる人びとです。ですから、昨日も「ピープルズ・プラン研究所」という、私も属している研究所の討論会があって、そこで何人かの人から声をかけられました。一人は、「太田さんの名前を変な所で見たと」と言いました。「どこだったっけな。そうだ、ルネサンス研究所だ。先祖還りしたんですか」と言う。「あれ、私の先祖はブントだったかなあ」と思ったりしました。もう一人は「ブント色を消すために、あなたはいいように利用されているんだ」と言う。私にそれほど利用価値があるとも思えないので、「いや、これは、一応、私なりの主体性で選んだ道だから」と、そのように答えてはおきました。

市田さんが言う「ルネサンス」とは、最初に言ったように、この二〇年間の世界的な動きを捉えた用語なので、この二〇年間のことを思い出してみます。私は、さまざまな社会運動の中で、例えば、それは、二〇年前であれば反PKO闘争であり、恒常的なものとしては、反安保、反天皇制、あるいは政治犯に対する死刑攻撃阻止（それは、現在では、政治犯に限らず、死刑制度そのものの廃止という方向性を目指していますが）、国際連帯といったようなさまざまな課題にかかわってきているわけですが、それは、多くの場合、内ゲバ党派以外の党派の人びと

もかかわっている大衆運動の現場でした。ですから、一定、党派の人びととの討論も、それぞれの課題に即してあるわけですが、その過程で、例えばある特定の時期のソ連を、あるいは中国を、カンボジアのポルポト政権を、どのように評価するかというような、深刻な議題になることもあったわけです。その時に、私はよく「党なき共産主義者」という自己規定の下で発言しました。もちろん、アナキストと言ってもいいのですが、私としては、どちらかというところ、ボルシェヴィキに必ず負けることになっているアナキストを名乗るよりは、「党なき共産主義者」というのはちょっとかっこいいんじゃないかなあと思って、現在もこの呼称を主体的には選んでいるわけです。なぜそうなのかということこれからお話しして、現在の問題意識につなげたいと思います。

共産主義が希望の根拠になっていた時代

みなさんが出自を語られたので、一応、最小限の「プライバシー」を言わなければならないかなと思います。私は一九四三年生まれです。現在六六歳です。北海道の釧路に生まれました。私の年齢からすると、一九五〇年朝鮮戦争あたりに小学校に入るわけですね。一九五〇年代はいわば戦後民主主義の全盛期であり、北海道はご存知のように、あの時代「革新王国」と言われるぐらいに左右両派の社会党が強い状況であって、そういう中で周りの教師とか家庭環境もあったと思いますが、社会主義というものに関して、漠然たる憧れというようなものをわりあい幼いころから持ちながら育ったと思います。六〇年安保は高校二年生でしたが、当時のことですから、当然、高校生独自の集会やデモを行なうというようなかたちで、一定の関わりがありました。ある日、友人とふたりで街中に行なわれている大学生（当時は、北海道学芸大学釧路分校がありました）のデモを見に行き、警官隊ともみ合いになっているのを見

て興奮してデモ隊の中にとび込みました。最後の総括集会のときに、大学生に「きょうは、革命的な高校生が二人参加した」と言われたのですが、翌朝、共産党系（だったのでしょうか）の高校教師が真っ青になって駆けつけてきて「あれはマル学同と言って、とてもじゃないけど君たちが付き合っはいけないグループだから、もうこれからは付き合うのはやめたほうがいい」というようなことを言われた。そんな感じの時代です。

その頃は、私にとっては、共産主義というのは憧れというよりは希望の根拠になっていた時代でした。ちょうど卒業する直前ぐらいに、コンゴのルムンバという首相が暗殺される事件がありましたが、この事件をうけてすぐ、モスクワに「ルムンバ国際友好大学」が出来るという話が伝わってきました。これを聞いて、「ああ、僕はもうここに行くしかない。革命の都＝モスクワで、第三世界のさまざまな地域の青年たちと一緒に学ぶ道が自分にとっては正しいんだ」と思い込んだわけですね。ところが、調べてみると、日本から選考されるのは、共産党と社会党の中枢幹部の娘・息子たちが優先的だというような噂を聞いて、これは駄目だと思って諦めました。そして、六二年東京外語大学のロシア科に入りました。それは、やはり、一九世紀ロシア文学と二〇世紀社会革命という、この二つの大きな出来事を一つの大地が抱えてるロシアというのはすごいなという非常な単純な憧れがありまして、これを極めずして何ぞという感じで行ったわけです。しかし、一九六二年というのは、安保闘争から二年たっておりますし、もう新左翼の時代ですから、東京に来れば、北海道の釧路では得られなかったありとあらゆる情報が一斉に自分に襲い掛かってくるわけですね。ですから、それまで、フルシチョフのスターリン批判から六年たっていましたけれども、ソ連の現実というものがどういうものであったのかというようなことも含めて、当時はイン

ターネットの時代でもないのに、若い一八歳精神では処理できないぐらいの新しい情報が押し寄せてきて、その中で、じゃあ一体これからどうしようかなというような模索の時代であったと思います。

高校時代には、ソヴィエト経済学者の野々村一雄や作家の五味川純平のような人びとが書いた、ソ連を「大きな約束の土地」として描いた本があふれており、それらも読んでいたわけですが、他方、兄の本棚から埴谷雄高の本も抜き出していた。そこでは、厳しいスターリン批判が行なわれている。幼いからわけが分からず、ソ連讃歌とスターリン批判の狭間で立ち往生してしまったわけです。それが、東京へ来て、一挙にカタがついた形になりました。加えて、埴谷さんの論文から「前衛党」というものが主導する革命に対してほとんど希望を持つことができない、という気持ちになっていました。ですから、学生運動についても、当時であれば非常に真直ぐな形では、なんらかの新左翼党派に加わって活動するというのがあり得たわけですが、私は党派に加わるという道を自覚的に選びませんでした。外語大というのは、一学年四〇〇人、総計一六〇〇人の小さな大学です。当時は、革マル、民青、社青同解放派がいたと思いますが、革マルの人たちは他人の名付けがうまくて、私たちのことを「吹き溜まりグループ」と呼んでいた。個別闘争の課題で小集団を作っては何らかの形でそれに関わり、一つの課題を担っては解散し、また次の課題へ、というようなことをやっていたからです。

そういう時代の中で、菊池昌典さんの研究を軸にして、スターリン時代の実態というのもずいぶんはっきり明らかになっていきましたし、同時に、日本の党派運動を見ていると、共産党も新左翼も含めて、そのソ連のスターリン体制下で現実となったものが、そのままこの日本の一九六〇年代の党派運動の現実の中には見えてしまうという確信がますます強まってきました。そこで、私としては、党派運動とは一線を画しな

がら「一人一党」といってもいいのですが、一人で、あるいは個別課題に即した小集団ごとの運動で、この状況をいかに切り開くことができるのかということを考えてきたということになります。

ヨーロッパ中心主義の世界像からの転換

六〇年代後半には、私の一世代上の人びと、その中には、何を隠そう、当時第四インター日本支部を名乗っていた太田竜氏もいましたし、映画評論家の松田政男氏とか、最後まで得体のしれない謎の人物であった山口健二さんとか、そういう方々がレボルト社というのをはじめていて、『世界革命運動情報』というのを一九六六年から、タイプ刷りの雑誌を出していました。私は学生時代からその研究会に出たり、出来た雑誌を売ってたりしていたのですが、卒業後も行く場所がなかった。松田さんや山口さんに、じゃあここへ来ればと言われて、とうとうレボルト社に寝泊りして、専従というようなかたちでそのまま居座ってしまったわけです。当時考えたのは——これは上の世代の人たちの問題意識に、私が遅れて引き継いだということでもありますが——高度経済成長を遂げてどんどん産業大国になっていき、かつ消費文化が社会全体に浸透していく日本のような社会にあって、今まで希薄であった民族・植民地問題、つまり帝国主義の植民地支配という問題の重大性にこだわろうということでした。当時の、一九六〇年代後半の時代状況を考えていただければわかるように、まさに今までヨーロッパ中心主義の歴史像・世界像からすれば、周辺部に追いやられていた地域でこそ反帝国主義闘争が高まっていたわけです。それは、現実に展開する歴史創造の主体として、今まで浮かび上がってこなかった地域の人びとが闘っている、そして歴史の新たな解釈が行われつつある、あるいは私たちが再解釈を迫られていると、そういう状況の下で、そのような問題に突き当たったわけです。

ですから、私も自分なりに小集団で関わった一九六五年の日韓条約反対闘争というものにおいて、いかにわれわれが日本の朝鮮に対する植民地支配という問題意識を欠いたまま現状分析をやっていたかという問題も、後追いで気づいたわけです。それから、私は冒頭に言ったように北海道の出身ですから、父親も母親もいわば植民者(コロン)として明治維新以降行っている人間の末裔です。明治維新国家は一八六九年に蝦夷地を改称して北海道と名づけて、近代国家の枠組みの中に包摂してしまったのですが、これを日本国家が初めて行なった植民地支配であるという問題意識を、当時、あるいは長いこと自分の中に生み出すことが出来なかったというようなことで、近代史の見直しというところに問題意識は集中していくということになりました。

その後、七二年の連赤を見届けて、私は、先ほどから言っているように党派的な関わりがなかったのも、どんな関係者もあそこにはいなかったけれども、やはり、私たちも広い意味ではその大枠のところにはいたし、新左翼運動が行きつくところまで行きついたという、ある種の深い思いがありました。また、ちょうど『世界革命運動情報』という雑誌も行き詰まりに直面して、そろそろやめて、レボルト社自体を解散しようかという事態になっていたのも、その段階で、私は外から日本を見てみたいと思って、七三年から、結果的には三年半、ラテン・アメリカ各地を放浪するという、そういうことになりました。七〇年代後半に帰ってきて、縁があつて現代企画室という小さな出版社に関わって、そこで、主に人文科学書、特に、先ほど言った民族・植民地問題、帝国主義の植民地支配、そのような問題に関わっての、あるいは、もちろんそのような分析だけでは、この大きな社会をまるごと捉えることはできないので、文学とか美術とかさまざまな分野に手を伸ばしながら、出版の仕事しながら、先ほどから言っているその時々の政治・社会運動の課題に関わ

ってきているというのが現実のところでは。

最後に、市田さんが言われる「最近の二〇年」という問題意識に触れます。二〇年ということ言えば、さかのぼると、一九八九年から一九九一年にかけて、すなわち、ヒロヒトが死に、天安門事件があり、東欧圏の社会主義独裁体制の崩壊が始まり、ベルリンの壁が倒れ、最終的にはソ連の崩壊に行きついていく——そのような時代です。同時期には、イラクのクウェート侵攻が行なわれ、これを理由にして湾岸戦争が引き起こされます。この時代は、世界史的に見ても日本的な規模で言っても、戦後四五年間一貫して続いていた「世界秩序」を丸ごとひっくり返すような大変な時期だったと思います。それ以降出ている問題ということ言えば、それは、日本の中では、とりわけ、社会主義の敗北ということが、ソ連批判を行なっていたわれわれにも及んでくるような、深刻なゴディブローであった、と言えると思います。アナキストであるから、あるいは、ソ連批判を徹底的にやってきて「真の社会主義」を目指す理論と実践を展開しているから、あの九〇年・九一年の打撃から立ち直ることが出来るという立場ではなくて、誰もが、その批判にさらされているという、そういう時代が来たと思います。ですから、その中で、もうすでに当時後退し始めていた「現実批判の言論活動」というものを、どうやって後退させないで踏みとどまることが出来るか。それは、私にとっての一つの大きな課題でした。ですから、例えば、労働党というふうになり、社会主義を自称しているから、あの奇妙な北朝鮮の国家体制ですら社会主義というふうに見えるわけで、そのような現実が進行している時に、拉致問題に関して、あるいは、北朝鮮の国家・社会をどう分析するかに関して、やはり逃げる場所はないだろうと私は考えたわけですね。ですから、日朝首脳会談以降の八年間、私は拉致問題の批判的な分析にかなりの時間を割いてきましたが、それはそのような現

実肯定の上に日本のナショナリズムの扇動が強まっていく今の社会情勢をどのように食い止めるのかという課題を私なりに考えたからです。われわれがいま直面している重大な問題のひとつは、日本ナショナリズムの悪扇動といかに対決するか、ということです。ナショナリズムの高揚は、東アジア地域全域に見られることです。このことは、ソ連崩壊によって消滅したはずの東西冷戦構造が、唯一東アジアでは継続しているという現実と不可分のことです。それは、日本が抱え続けている歴史問題に繋がることであらうであり、ここから派生する問題の広がりや深みを重視すべきだと考えます。

ルネサンス研究所の課題

グローバリゼーションの問題に関しては、これは、近代という問題をどのようにとらえるかという非常に重要な問題とかかわってくると思います。新開さんのレジュメに、グローバリゼーションのところで、先住民問題に触れたメモもありましたけれども、この問題も、われわれにとっては、たんに二〇世紀後半になって突然現れたグローバリゼーションということではなくて、近代資本主義の生成過程で、一体どこに第一期のグローバリゼーションの起点があったのかという問題にまで及びていくべき問題意識でしょう。私の考えでは、これは、ずっとこの間主張しているように、コロンブスの大航海以来というのが基本的な考え方なのですが、そこに遡って、資本主義の生成・発展のあり方をいかに批判していくのかというのが、一つ大きな課題であると思っています。そのとき、一国の内部における階級対立とは異なる位相で、他者を征服し・植民地化し・奴隷化するという形で、他者存在の否定の上に、自己実現を可能にしてきた資本主義的発展を俎上にのせる論理が必要であると思います。

最後の問題です。六〇年代および七〇年代闘争以降の過程の中では、世界的にも日本的にも、新自由主義の圧倒的な力がふるわれてきました。そこで、大きな労働組合あるいは革新政党というものが、世界的に見て、どんどん消えて行きました。それは、決して、悪いことばかりではなかった。なぜなら、それは、かつてなら大労働組合や大きな政党が号令一下でもっていた上意下達の支配体制とはまったく別な形に、民衆運動が転換する好機でもあったからです。逃れることのできない必然性をもった運動が自分自身の課題に即して全国で展開されている。これは私たちが大事にすべき大きな要素であると思います。ただ、その段階は、いわば六〇年安保のような全国的な政治闘争ができなくなったという状況と重なり合っている。小さな運動が根をはって各地に——世界各地と言ってもいいと思いますが——広がっている時代は、同時に、大きなある一つの政治目標をもった運動が全国的な規模で展開されなくなった時代と重なっているのです。この問題をどうするのかというようなこと。そして、これは、世界的に見て、日本に特殊な現われ方をしている問題であり、これも、これからのルネサンス研究所の課題であると思います。

やはり、最初予言したように、動揺をそのまま繰り返すような内容になってしまいました。時間切れです。終わります。

【関西からの報告】 <榎原 均>

ルネ研基幹研究会「現代」の打ち合わせ会の報告です。

- ・日時：2010年12月25日午後2時15分から4時50分
- ・場所：きずな事務所（京都駅八条口）
- ・参加者：14名

1. ルネ研関西の体制について

最初に新開のほうから、12月12日の発足集会の報告とルネ研関西の体制について提案がありました。①呼びかけ人を中心にルネ研関西運営委員会を組織し、運営委員を補充すること。②毎月一回の研究会とそれを保障する事務局体制をつくること。③賛同人を研究員とし、関西で50名くらいまで増やすこと。④研究会は基幹研究会「現代」、分科会、公開シンポジウムの三本立てとすること。

以上の報告について了承し、基幹研究会「現代」の打ち合わせに移りました。

2. 基幹研究会「現代」の構想について

榎原から、レジュメ「ルネ研研究会構想についての話題提供」に基づいて問題提起がなされました。以下にレジュメ該当部分を引用しておきます。

「2. ルネ研の研究会活動とは

①（ルネ研以外にも）研究会は沢山ある。

ルネ研関西の周辺でも、既にKCMが活動し、またきずなグループの研究会も始まる。KCMは党派的な活動家の勉強会で、きずなグループは若手の実践家を対象にしようとしている。

②研究員のための研究会

数ある研究会への差別化をはかるとすれば、研究員のための研究会であるということ。研究員になるべく若手のメンバーを増やしていきたいこと。

③対話的コミュニケーションの創造（『「いま」「ここ」からの社会変革論』参照）

研究会は文化的勢力であり、一つの文化圏としてのアイデンティティを作り出すことがめざされるべきではないか。それは対話的コミュニケーションの創造から始まる。

④対話的コミュニケーションの作法

参加している研究員の活動紹介からはじめる。問題意識も提出してもらう。その上で講師に話してもらう。

⑤テーマ設定。協議の上決める。」

以上の内容の報告に基づき、本日の打ち合わせ会議も、研究員のための研究会として、対話的コミュニケーションの作法で進行していきたいと提案がなされ、了承されました。

参加者から、自己紹介と研究所への抱負を語っていただいて、どのような研究会を始めるか議論しました。自己紹介は1時間30分かかりましたが、参加者からのレジュメ提出はなく、研究会についての積極的な提言はみられませんでした。数多くある研究会とは違ったものという声はたくさん上がりました。

研究会のあり方について、講師の一方的な話をきくというスタイルは取りたくない、また、話題提供者を複数用意するが、参加者全員が話題について発言する形をとるといった意見でまとまりました。

とりあえずのテーマとして、「運動の変容」とし、初回の話題者は榎原「緊急の課題」（テーゼ部分のみ以下に引用）の検討と、

寺田「天皇制を問う・・・」の活動報告。その次は後藤「ネグリ論」を予定する。初回は1回では終わらないだろうから、2回ぐらい予定しておく、といったことが確認されました。

第一回、基幹研究会「現代」の日時は2011年2月19日（土）午後1時より、場所は「きずな」事務所としました。

3. 第一回基幹研究会「現代」 テーマ「運動の変容」

運動の変容というテーマ設定で、榎原「緊急の課題」（1988年）がたたき台とされました。以下にその冒頭のテーゼ部分を引用しておきます。

「緊急の課題 テーゼ

(1) 既成の党派（旧左翼・新左翼を問わず）の政治は、全て、最小限綱領のレベルの要求で大衆運動を組織することを土台にしていた。従って左翼の意識性は、この土台に制約されているが、この意識性の狭さが80年代における左翼諸党派の運動の後退をつくりだした根本的要因である。

(2) 今日、自然発生的な大衆運動の多くは、最大限綱領のレベルの要求で自己を組織している。それゆえ、最大限綱領のレベルの要求で大衆運動を組織することを土台にした新たな政治が問われている。そして、この新たな政治こそが、今日の活動家たちがもたねばならない意識性の内実なのである。

(3) 最大限綱領のレベルの要求にもとづく大衆運動は、最小限綱領レベルの要求にもとづくそれとは、その運動の質、発展法則が異なっている。活動家たちは、最大限綱領のレベルの要求で大衆運動が自己を組織していることを認めるだけでなく、自分たちの意識性を確立するに当たって、この相違に注目しなければならない。」（全文はHP オフィス榎原：学習したい人のために）

【編集後記】

2年近くの議論・放談会・勉強会・飲み会などの紆余曲折を経て、ルネ研はスタート。新開さんが市田報告をたたき台にして議論を始めようという提案をしてから、話はどんどん具体化した。古賀さんの発言にもあるように、会則、会費、代表者もない集団である。運営委員会と事務局だけは設置された。これから各研究所員によって推進される多様な研究会活動を調整したり、参加者間のコミュニケーションを図るためである。言うまでもなく、それは、中央委員会でも書記局でもない。ルネ研が文化・思想運動の新たな潮流を創りだせるかどうかは、参加された皆さんの創意ある提案や構想にかかっています。この「ニューズレター」を活用してください。ブログもとりあえず設置されているし、榎本さんから、本格的なルネ研電子戦略構想も提案されています。(事務局長・松田健二)